山と博物館

第26巻 第11号　1981年11月25日　大町山岳博物館

ワラ細工をする老人（飯島角松氏）　撮影　丸山隆士

ワラ細工のこと

明治生れの私は七十四才の老人ですが、私の小学校へ通う頃、冬になれば父の作った、ごんぞをはいていったものです。上はきもワラぞうりをはいていました。私の若い頃、冬仕事に出るには「しっぺい」という物をはいてその上に「ワラハバキ」をかけていきました。この「仕たく」ならどんな雪の中の仕事も出来ました。又みのは山仕事には、こんな良い物はありません。昼やすみにはそれを敷いて「昼ね」をしたのです。戦前物資のない時、ごんぞやぞうりを沢さん作って売りました。その外、土方用もっこも作って売ったものです。今度大町市老人クラブの人達十数名に、十二月から明年三月迄、月三回位ワラ教室を開いて十二月はお歳取り用の「しめなわ」作りをやり、つづいて、ぞうり、わらじ、みののほか観光土産「ミニゴンゾ」を教えています。まだ私の作るような物は出来ませんが、どうやら、はける形の物が作れるようになりました。冬の寒い時のはき物で「ごんぞ」に勝てるものはありません。ごむぐつのようにすべることもありません。私は冬の雪かきにはごんぞをはき、みのを着て、雪かきをします。これほど暖かいものはありません。又こんごは婦人の皆さんの台所仕事には暖かいはきものです。私は観光土産のミニゴンゾを作ってスキー場へ売りました。

今は冬期間二百足位は作っています。一足三百円―五百円位に売れます。老人クラブの人達にも教えていますが、まだ売るものは作れません。そのうち良い物が作れるようになります。私は観光土産用の「ミニゴンゾ」を作って大町市の土産にすれば良いと思っています。

今の老人でも、みのやごんぞを作れる人は少くなりました。このような昔の人達の知恵を子孫につたえていきたいと思います。

大町市北原町五、一三七　荒井　新吾

安曇の方言と私

福沢武一

一

方言が私に病みつきになって久しい。大学を卒業し、長野市へ赴任した昭和十七年からだから、もう四十年になっている。その間、安曇地方の方言にふれ、これからも死ぬまで離れられない。そのいきさつを手短かに語ることにする。

私は上伊那中部、伊那市の産である。次のようなわらべ唄を歌って育った。

山越して、川越して
コウヤのおコンさ、あんべおいび。
まだ寝ているニ。
おずるや、おずる。

コーヤは染物屋。アンベは「遊びに」がつまったもの。オイビは「行きましょう」、ニは「よ」、オズルは「のろいお人」。――このように意味をとっていた。コーヤが「紺屋」から来たことを知った後も、オイビの原義は解せなかった。

中学へ進むと、級友が郡下から集って来た。駒ケ根方面の仲間はソーケ（そうですか）を愛用した。辰野周辺の仲間たちはソードー（そうだよ）を連発した。野暮くさい言葉づかいだと思った。

やがて高校時代を松本市ですごし、中信の方言の一端にふれた。ソーダジ（そうだよ）が強烈に響いた。そのジは南信の柔和なニ（「寝ているニ」のニ）と一つものであることが奇異だった。ソーセ（そうだよ）も耳についた。そのほかの記憶は薄れたが、松高小唄のリフレインが全ての代弁をしてくれている。

来ましょ、信州の雪国へ、
寒けりゃこたつがあるだんね。

「来ましょ」は、共通語の「来ましょう」ではない。「来マセ」だけでも丁重なところへ、ヨが添って、マショとつづまり、限りなく敬愛の心が厚いのだ。「あるだんね」のンこそ南信のニに当たり、それにネが加えられて、柔和の限りを尽くしている。

高校の三年間はあっけなく終わった。東京の大学時代は共通語に埋没し、「いかに生くべきか?」を自問し、その目途を見失い、真暗いどうどうめぐりを続けた。やっと出口が見え出したとき長野市へ赴任した。それが昭和十七年、今次大戦に突入した翌年だった。

二

長野市へ来て、改めて方言に目覚めた。ことごとに南信とは相違していた。ゴワス（ございます）、イキス（行きます）は驚きだった。一方、底のところで通じていることにも気がついた。たとえば、北信の常用語エベ（行こう）は、上伊那のオイビのイビと一つだ。ひだこを子供の時以来アマビと呼びなれていた。北信のアマビレル・アマブレル（焦げる）が種明かしをしてくれた。こたつの熱気で股間が焦げたとみたのだ。教え子たちが交わしている「そうだオ（よ）」は辰野地区のソードーを思いあわさせた。ダオがつづまってドーになったのだ。そのオは上代の純粋な日本語ヲの名残りだ。一例を挙げる。

舟渡せヲと呼ばへども（万葉集一一三八歌）

「舟を渡してくれヨ」と呼ぶけれども

もうソードーをさげすむどころか、敬愛しないではいられなくなっていた。私はすでに方言のとりこであった。ふるさと――上伊那には限らない、長野県全体、の懐しい言葉を集め、比較し、一語一語の本来の意味へさかのぼることが私の任務になっていた。

敗戦の年の末、生地上伊那へ帰った。北信の方言採集は一段落になっていた。

上伊那の方言採集は容易にまとまって、一語一語の考察作業が始まった。北信の資料は大いに参考になった。それにつけても、中信地区を空白にしておけなくなった。昭和二十七年、願いがかなって大町市へ転任になった。赴任の日、次のように歌った。雪降りの、底冷えする日だった。

でも僕はひるまない。
この土地に僕の仕事が待っているからだ。
僕はここへ来たことを喜んでいる。
雪よ、
お前はこよなき歓迎の挨拶だ。（抜出）

「仕事」は方言の調査だった。折りはよし、「北安曇・大町市誌」の準備が進められていて、方言の項が私へふり当てられた。そればかりか、南安曇・東筑摩両郡誌の方言調査・執筆まで依頼された。早速、そのための調査簿を作成した。中信全域の市町村に調査用紙を配布し、一気に資料を収集することができた。その結果、次のようなことが明らかになって来た。

三

上伊那のソードーと北信のソーダオは切れていない。中信には両方が分布し、橋渡しをしている。かてて加えて、新顔が見出される。ソーズロだ。ソーズラ（そうだろう）に例のオが添えられ、ソーズロ（そうだろうよ）になったのだ。

エベ（行け）も中信全域にいきわたり、上伊那に続いている。アマブレル（焦げる）も北安曇と東筑摩北部に及んでいる。アマビ・アママベ（ひだこ）の方は前時代に全県下の共通語だったことが推定される。

竹馬は上伊那北半でサンゲーチ。北信西部ではサンガシ。本場は中信だった。ここにはサンガシ・サンガエシ・サンガイシ等々が大幅に併用され、周辺地区に波及している。上伊那のサンゲーチは余波である。基本語はサギガアシ（鷺が足）。詩趣たっぷりだ。

あかぎれの治療に膏薬を焼き入れる。これを上伊那でソクーと呼ぶ。原義を了解させてくれたのは中信にまんべんないソクイ（続飯）

だった。ソクイを活用させたのがソクーだ。もっとも、ソクイが共通語と知って唖然とした。

これらのことは拙著「信州方言風物誌㈠㈡㈢（昭三一―三）・「信濃太郎（方言の話）」（昭四四）で述べた。その中で解明できなかった一つを追記したい。

南安曇西部、大野川のトチハカリ（あめんぼ）には手を焼いた。下伊那でキツツキが同名のトチハカリだった。解明へは半歩の押しが不足した。その半歩は次のようだ。

木曽にトチカンジョ（てぐす虫）、遠い四国の香川にトッカンジョ（とかげ）がある。言葉としては一つものでなければならぬ。この二つの動物は、ちょっと位置を移動しては止まり、またちょっと移動する。なぜ停止するのか？　勘定をトチッタ（間違えた）ことに気がついて、思案にとらわれたのだ。またやりなおしにはい出すのだが、またまたトチッてしまう。同じことがトチハカリにもいえる。あめんぼはつんつん水上を滑走するが、しばらくしてぴたりと止まる。キツツキも、しばらくタタタタと木をたたき、ぴたりと止まる。トチッタ、と気がついて、ハカリ（計算）を停止し、ひと思案した後、また次の計算をする如き挙動だったのだ。

四

中信の調べは調査用紙を準備し、それに記入を求めた。それと並行して、現地へ出向いて補足を試みた。

北安曇北端の中土は秋のさ中であった。稲がハザにかかっていて、村人が交わす次の言葉が耳に飛びこんで来た。

「ハシライダかや？」

ハシラグ（はしゃぐ、乾燥する）は初耳だった。そこから受け持ちの生徒の家へ立ち寄った。「ヤバシテあって…」と、母親はいたみ入りながら招じてくれた。この言葉がまた初耳だった。上伊那の児童語パッチイ（きたない）の素性が一気に判明した。その喜びは小さくなかった。宿に帰って、早速「全国方言辞典」に当たった。

ヤバチイ　㈠しめっぽくてじめじめする。
㈡きたない。　東北地方

ヤバシイ　きたない。福島・越後・富山

中土のヤバスはまさにこの血統である。

ハシラグ　乾く。青森・秋田・山形・新潟・石川・岐阜・高知

これらに限らず、東北系方言が北安曇北部から大幅に侵入している。その一例を追記したい。

ネマル　座る。北安曇（北部・平・八坂）・南安曇有明・東筑摩明科

ネマル　㈠座る。東北・北陸・岐阜・島根
㈡寝る。長崎・鹿児島（全国方言辞典）

鹿島の谷を訪れたのは春先だった。谷の入口、源汲の部落にさしかかると、老人が目についた。これから道祖神をまつるのだとのことだった。あれこれと方言を問いかけた。おやつはショシャビ。老人が口にするこの語音は愛くるしい限りだった。も一つ忘れられないのはクタタメル（こらしめる）だった。一語の貴重さは帰宅してから確認された。

クタタメル　道理をいいふくめる、徴戒する。床内（浜荻）・三重度会（全国方言辞典）

最後に、梓川をさかのぼった日のことを書きとめないわけにいかぬ。雪の後の寒い日であった。

梓川の峡を訪ひきて雪にあひぬ今年初めての雪　重きミソテ雪

地につくやいなやに影なきシトレ雪はこごえるらしき　靴のつつとすべる

ミソテ（みぞれ）は北信・中信にまんべんない。シトレ（同）は南・北安曇でわずかに耳にした。それはシトル（水気を持つ）から来ている。数すくない縁者がいる。

シトレ　みぞれ。島根・山口（前掲書）

その日、奈川村黒川渡に一泊した。二日にわたって斎藤善一翁に相手をつとめてもらった。それは最良の調査だった。

五

大町六年間の後、北信の屋代、諏訪と転じ、ついの住みかへもどった。長年手がけてきた上伊那方言の考察を果たし、「すくなし」と題して上巻を出版したのは昨年のことである。それを追いかけて北信方言の考察が終わりに近づいている。今度こそ中信の番である。

長年の間に私の方法と目標は定まった。比較が唯一の方法である。目標は、一語一語の由来を明かにすること。共通語・古典語から解明するのではない。その逆で、方言から共通語・古典語を明らめること。もはや地方方言のわく内にとどまっていない。明らめたいのは日本語そのものなのだ。

与えられた余白もとぼしいので一番簡単な例を挙げる。――カナヘビ（金蛇）はトカゲと同類で、土色をしている。ともにカナギッチョが北信・中信の通称である。ギッチョは「器用」のなまり。カナの「金」は人まどわせの当て字にすぎない。昔のカンナ（鉋）、いわゆるヤリカンナで、槍の穂先の形をしている。トカゲはこれを巧みに扱う人物に見立てられた。頭部の形の酷似からだ。関東一帯のカマギッチョ（かまきり）と好一対をなしている。この発見は私を有頂天にさせた。愛されているのは語なのか？　私なのか？

いわずにいられない。日本語ほど粗末にされて来た国語はない。これは涙が出るほど情けない。一語一語の本来の意味、語源だ、それを日本人は知ろうとしない。そのせんさくを学問以前、または学問以下だと学者は考えている。いつまでも前進は期待できない。ここには国語愛など絶対に存在しない。

学生時代に「いかに生くべきか？」を自問し、懐疑の果てに自答した。――「定められた人生の目的などない。ないからいいのだ。自分で設定し、その目標に向かって生きることだ。」

精一ぱい生きることを自らの命題とした。小さくてもいい、花を咲かすことだった。

今後せめて十年間の余命を期待したい。その間に果たすべき仕事が山積している。その一つが中信方言の考察である。一語一語が詩であり、歌である。それらを読解したい。その仕事を一つの花に咲かせたい。幸いなことに、どうやら実現可能なような予感を覚える。

（昭五六・一〇）

果実酒作りを楽しむ
―山麓の秋を追って―

清沢由之

山は、春より秋がいい。田舎で育った私は幼少時代年寄りによくこう言われた。反論もあろう。あの樹下にイカリソウやヒトシズカの咲き出す、新緑を迎える頃の山は何物にもたとえがたい、と。また、山登りを対象とされる方々には、それぞれの好みもあろう。年寄りの言った「山」は、山里の人々が長年生活を通して親しんで来た山であろうが。

さて、山は、なぜ秋が楽しいのか。私なりに考えてみる。一番は何といっても、森の小人、恋人たちキノコ。キノコはご存知のように決して秋だけのものではないが、サクラシメジやハツタケに始まり、クリタケやムラサキシメジ、ナメコと続くシーズンは、やはり秋の魅力であり、人を引きつけてやまないものをもっている。

次に人によっては、例のスガレ取り（クロスズメバチ）を推す人もいようし、紅葉のあい間からみる雪の峰を語る人もいよう。しかし、もう一つの魅力は何といっても木の実であろう。「山は秋…―。」といわれるゆえんの大きな一つがこれであろう。ヒョウタンポクやヒヨドリジョウゴのように毒のあるものや、ルリミノウシコロシのように食用には不向きのものもあるが食用になるものも多い。そして、色といい味といい自然の妙といえる個性的なものが少なくない。あのアケビの独特の紫と味。マツブサの特有の香り、味。ヤマボウシのとろけるような舌ざわり、サルナシ（ヒラクチ）の風味等々である。これらの中には、果実酒として楽しめるものも多い。

次にこれらの果実を含め私が利用させてもらっているものを山野を中心に若干あげてみたい。

コブシの実

一、材料

〔木の実〕

ウワミズザクラ―サロメチール様の変わった風味でビターとしておもしろい。

マタタビ―八月末から九月上旬がとりごろ、漢方に使う虫こぶ（木天蓼）もこの頃拾える。やや飲みにくいのでレモンを入れたり、飲用時ウメ酒とミックスするのがよい。

ナツハゼ―穂高方面でいうコンコルハジキ。酸味強く、色も濃い紫の一級品。

ガマズミ、ヨウゾメ―薄いピンクのさわやかな味。

ナナカマド―わずかな苦み、しぶみ。淡い橙色でいかにも野山の酒。三ケ月以上は漬けておいた方がよい。

マツブサ　―大町ではマツブサ、白馬ではマツフジという人も。特有の松に似た香りと味。糖分とうまく合った時に格別。実は一ケ月ぐらいで出した方が味も色もよい仕上り。

サルナシ―霜が降りて甘くなってからがよい。マタタビは逆に固いうち。一昨年は豊作だったが、昨年今年は少ない。山に人の手が入りすぎて少なくなって残念。

ズミ―コナシ。酸味のある若いうちがよい。コケモモと同様の味。

カワラグミ―大北地方の川原に豊富。グミは秦の始皇帝が不老長寿の酒という説もある。ややしぶみのある野趣のある酒となる。レモンの一切れを入れるのもおもしろい。

クサボケ―庭のボケでもよい。他に例をみない独特の高貴な風味。糖分を忘れずに。半年以上の漬け込みが必要。

コブシ―山地性のタムシバでもよい。春の花のつぼみもよいが独特のコハク色の珍酒。

〔木そのもの〕

クロモジ―揚子の木。かなり強烈な香りが出るので後で薄めたり、レモンを一緒に漬け込んだり、マムシ酒を混入したりするのもよい。ダンコウバイも似た風味で利用できる。

キハダ―苦味のある黄色の健胃酒。

アズサ―ミズメ、ヨグソミネバリ。サロメチールの香り。ビターとしておもしろい。

〔草〕

イカリソウ、ヒキオコシ、アキカラマツ―共に苦みのある健康酒となる。

〔キノコ類〕

マツタケ、シイタケ―一風変った酒に。

サルノコシカケ類（カワラタケ、カイガラタケ、コフキサルノコシカケなど）―薬用酒として。

〔その他の山野のもの〕

ケンポナシ、キイチゴなどイチゴ類、ムラサキシキブ、シラカバの花、フキノトウ等々。

〔庭のもの〕

サトザクラの花、クワグミ、ユスラウメ、スグリ、アンズ、スモモ、ナツメ、ボケ、カリン、カラタチ、ザクロ、クコの木、葉、実

二、作り方、飲み方など

1、材料の二―三倍のホワイトリカー（ブランディ・ウイスキー）等に入れる。

2、糖分は入れなくてもよいが入れた方が味もよく、女性にも親しめる。

3、材料は三ケ月をメドに　く方がよい。

4、ストレート、カクテルなど飲み方に工夫。

5、三年くらいで更新した方がよい。

6、鳥や獣の食べる分は残す心の余裕を。

（白馬中学校）

サルナシ

訂正

第26巻10号、表紙下「秋の雲」の執筆は金田国武氏です。

また、表紙写真の撮影者は斉藤忠彦氏です。訂正しお詫びいたします。

山と博物館　第26巻　第11号
一九八一年十一月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）